



# 災害時に外国人を誰一人残さない ～東日本大震災から 10 年を振り返りさまざまな経験を 今と未来に活かす～

(一財)自治体国際化協会 多文化共生部多文化共生課/JET プログラム事業部調整課

震災後 10 年が経過し、地域には外国人住民が増加し、多文化共生の地域づくりが進み社会情勢も大きく変化しました。クリアでは、東日本大震災 10 年の節目に、この 10 年間の東北での復興の軌跡を振り返るとともに、地域で実践されてきたダイバーシティ（地域の多様性）に対応した災害対応について理解を深め、その積み重ねられた教訓を次世代に語り継ぐことにより、国連の開発目標 SDGs に掲げられている、誰一人取り残さない共生社会の実現を目指し、2021 年 2 月 8 日にシンポジウムを開催しました。

常に分かりにくかったようです。一方、海外で報道されるニュースは、誤報やデマが多く大変な状態



ダニエル・カール氏の講演の様子

であったとお話いただきました。

また、自身のボランティア活動については、高速道路が壊れていたため、一般道で 10 時間以上かけて現地に支援物資を届け、被災者の方と話をするなど、少しでも被災者の方を元気づけたいという気持ちでボランティアの方と一生懸命活動されたとのことでした。

最後に、大災害が発生した際に必要なことについて視聴者の方へアドバイスいただきました。まず、「衣・食・住」の3つが大事ですが、4つめに大事なものは「正確な情報」です。災害時にデマが広がってしまうと、人は誤った行動を選択してしまい、その行動が大変危険なので、デマを信じないようにするトレーニングが必要であると指摘されました。また、自分が情報発信する際は、情報源をしっかりと調べた後に発信することも大切であると発言されました。いつ災害が発生するかわからないが、在日外国人もボランティアを行いたいという気持ちが強いので、遠慮なく声掛けいただき、彼らと手を組んで活動してはいかがでしょうかと呼び掛け講演を終了されました。

(2) 「誰ひとり取り残さない災害対応」(田村太郎氏)

初めに、SDGs が掲げる「誰一人取り残さない」という基本的な考え方に触れてお話しいただきました。この目標が意味するのは、最も脆弱な人に焦点をあて、「まだ誰か取り残されているのではないか？」と目をこらすことが大切であるということでした。特に災害時は、ス

**災害時に外国人を誰一人残さない**  
～東日本大震災から10年を振り返り  
様々な経験を今と未来に活かす～

「東日本大震災復興の軌跡「ブルーインパズ」」  
震災後10年の復興の軌跡を振り返るとともに、この10年の間に地域で生じている国際的な理解の促進に向けた取り組みや、ダイバーシティ（地域の多様性）に対応した災害対応について理解を深めるために、オンラインでシンポジウムを開催します。

**オンライン(ZOOMウェビナー)開催**

**2021年2月8日(月)**  
**14:00～16:00**

どなたでもご参加いただけます！  
お問い合わせ先  
申込方法  
下記のフォームからお申込みください  
アドレス: <https://bit.ly/39fMcqj>  
申込期間: 2021年2月1日(日)  
定員: 300名

**基調講演**

「外国人の立場からの災害対応と復興支援」  
**ダニエル・カール氏**

「誰一人残さない災害対応」  
**田村太郎氏 (一財)ダイバーシティ研究所代表理事**

**パネリスト**

**プログラム**

14:00 開会挨拶  
14:10 基調講演  
ダニエル・カール氏  
14:30 モデレーター講演  
田村太郎氏  
14:55 トークセッション  
「震災から10年間の歩み」  
「外国人が主体的に参加する地域づくり」  
16:00 閉会

事業チラシ

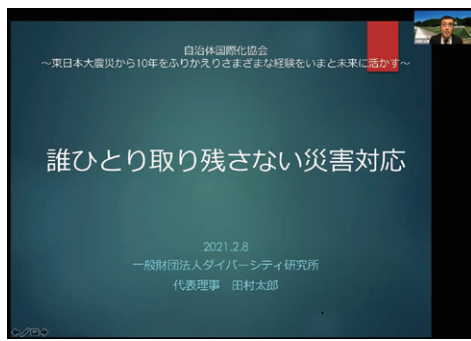
## 基調講演とモデレーター講演

シンポジウムの前半は、ダニエル・カール氏の基調講演と(一財)ダイバーシティ研究所代表理事 田村太郎氏のモデレーター講演を行いました。

(1) 「外国人の立場からの災害対応と復興支援」(ダニエル・カール氏)

自身の震災体験や、ボランティア活動などについて、写真を表示しながらお話しいただきました。震災直後、ダニエル氏は震災に関するニュースを英語に翻訳してTwitterなどで配信を続けました。原発のニュースは、専門用語がたくさん出てきて、在日外国人の方は内容が非

ピードとボ  
リウムが  
優先され、  
細かなニ  
ーズへの対応  
は後回しに  
なってしまう  
ので特に  
注意が必要



田村太郎氏の講演の様子

だにご指摘いただきました。

次に、「ストック情報」（これまでの教育・訓練などで蓄積された情報）と「フロー情報」（新しく発生したことや行動して欲しいことについての情報）の違いについてご説明いただきました。ストック情報が土台としてあるうえにフロー情報があることで、人は適切な行動をとることができるので、フロー情報だけを翻訳して配信するだけではなく、ストック情報が無い人達が適切に避難できるように情報提供を考えていく必要があるとご指摘いただきました。また、多言語化は手段であり、目的は「全体的な安心感をつくること」であると認識し、「翻訳効果」「承認効果」「アナウンス効果」の「3つの効果」を意識した多言語情報の発信が重要であるともご指摘いただきました。さらに、コロナ禍における災害対応の新しい避難様式として①在宅避難、②屋外避難、③疎開避難という避難所での「密」を防ぐ避難が重要になり、外国人住民への普及と配慮が必要なので新様式での訓練を行い、住民同士の交流が大切であるにご説明いただきました。

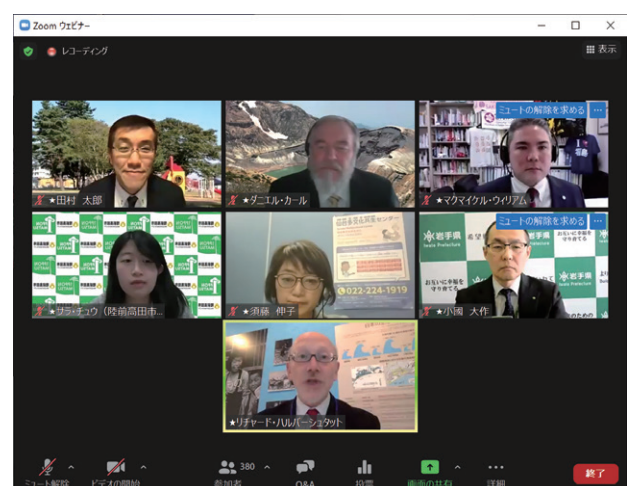
最後に、担い手としての外国人についてと、自治体や地域に求められる取り組みについてお話しいただきました。ストック情報を持った外国人が地域に増えているため、支援の担い手となりうる外国人として考え、研修などを実施する必要がある、そのためには、対象者（支援を受ける）側にいる人が提供者（支援を行う）側に参画することが大切であるとのことでした。また、訓練を重ね、相互に「ストック情報」を厚くすることと地元で働ける人材・ネットワークをつくることの必要性を説明し講演を締めくくっていただきました。

## トークセッション

シンポジウムの後半は、前半で講演を行った田村氏がモデレーターを務め、トークセッションを行いました。

パネリストとして、岩手県ふるさと振興部国際室長 小國大作氏、（公財）仙台観光国際協会国際化推進課長 須藤伸子氏、石巻市復興まちづくり情報交流館中央館長 リチャード・ハルバーシュタット氏、福島大学国際交流センター副センター長 マクマイケル・ウィリアム氏、陸前高田市国際交流員（CIR）サラ・チュウ氏の5名にご登壇いただきました。

トークセッションでは、登壇者それぞれの活動報告をしていただいた後、「震災から10年間の歩み」「外国人が主体的に参加する地域づくり」についてお話しいただきました。復興が進み、街もきれいになってきているため、震災があったことが分かりにくくなり、当時の大変さを伝えることが難しくなっているという現状をお話しいただきました。また、日本人と外国人がお互いに助け合い、支えあって、これからの災害対応、そして多文化共生社会の実現を進めていければと、それぞれの立場から前向きなお話しをいただき、「外国人にもできることがある。外国人にしかできないこともある。」というお言葉もいただきました。最後に、ダニエル氏から、「東北はこの10年でより強い地域になったのではないかと思います。痛ましい震災の後だが、より強くより楽しく生きることが出来ることは素晴らしいことだと思う。まだ、復興工事の真最中だからと東北に行くのを遠慮している人もいるようだが、皆さん遠慮なく東北に遊びに来てください！」と持ち前の明るい声でコメントをいただきました。



トークセッションの様子

当シンポジウムは400名を超える方にご参加いただきました。今後もオンラインを活用し、有意義な事業を実施してまいりますので、積極的にご参加ください。